



大木裕子著

オーケストラのマネジメント：芸術組織における共創環境

文眞堂 2004



〈研究の経緯〉

本書は、早稲田大学に提出した博士論文「オーケストラのマネジメント～仏米日の国際比較にみるオーケストラの経営と組織」をもとに出版したものです。

前職のオーケストラのピオラ奏者の時代から、わが国の文化に対する政策の貧困や非営利・プロフェッショナル組織のマネジメントの非合理性に長年問題意識をもっていました。

この問題を解決するために社会人入学した早稲田大学の大学院での5年間に、欧米や日本の主要オーケストラ団体に足を運び、インタビュー調査をもとに国際比較を行ってきました。その結果それぞれの団体の運営方法が、国の歴史や政策、国民性、さらに経営陣によって異なることがわかりました。

オーケストラの主たる関係者は、経営陣、演奏家、聴衆です。しかしこの三者の関心や利害は必ずしも一致してその関係が上手くいっているとは限りません。また、演奏家の能力を最大限に活かすためには個人と組織のコミュニケーション、指揮者のリーダーシップと演奏家集団のセルフ・マネジメント、演奏会でのプロフェッショナル(演奏家)と顧客(聴衆)との「共創」関係をつくりださなければなりません。これらの相関で最終的な演奏の価値が向上されることを「コンティンジェンシー・モデル」(環境適合モデル)を摘要して明らかにしました。

〈本書の内容〉

フランス、アメリカ、日本の3カ国におけるオーケストラ・マネジメントの比較から、日本のオーケストラに対して、財政基盤強化と、聴衆を惹きつけるオーケストラを創るための施策を提案しています。オーケストラの特徴をプロフェッショナル組織、非営利組織の2つの側面から捉え、統合的コンティンジェンシー・モデルをツールに、オーケストラ・マネジメントについて、環境と組織の関係から包括的に分析しています。

オーケストラのような芸術組織に市場原理をそのまま導入することは難しいですが、「聴衆」不在では存続していくことができません。芸術組織である以上、基本にあるのは芸術の質であり、優れた演奏による演奏家満足が、顧客満足を実現することになります。このためにも、楽員のモチベーションを引き出すマネジメントが必要です。そして、聴衆と共に創り出す「共創環境」が、オーケストラの将来を支えていくことになります。本書は、プロフェッショナルな非営利組織の継続的活性化の理論を提示するものです。

〈目次〉

- 序章 問題提起
- 第 部 非営利・プロフェッショナル組織とオーケストラ
 - 1. プロフェッショナルと組織
 - 2. 非営利組織の経営
 - 3. 非営利・プロフェッショナル組織とオーケストラ
- 第 部 オーケストラの国際比較
 - 4. フランスのオーケストラ
 - 5. アメリカのオーケストラ
 - 6. 日本のオーケストラ
- 第 部 21世紀型オーケストラの提案
 - 7. オーケストラの環境適合モデル
 - 8. エクスターナル・マネジメント
 - 9. インターナル&インタラクティブ・マネジメント

(おおき ゆうこ 経営学部教員)



カット 小金丸 崇宏 美術部3年



藤野敦子著

発展途上国の児童労働：子どもさんは結果なのか原因なのか

明石書店 1997



犬養道子さんの書いた『人間の大地』（中公文庫 1992年）の中に次のような文章があります。

「発展途上国では、子沢山だから、飢餓が発生するのではない。逆なのだ。貧しく、飢えるから子沢山になるのだ。」

すなわち、発展途上国で、子どもが多いのは、無知や避妊技術の遅れなどではなく、彼らが子どもを欲する経済合理的な理由があるということなのです。

この言葉に強いインスピレーションを受け、事実であるかどうか、経済学の理論モデルで、また、インドのデータを使用した実証分析によって、解明したのが本書です。

本書の分析から、児童労働者数が世界一と言われているインドにおいて、子どもを働かせることができるから子沢山になるという仮説（child labor hypothesis と言います）が妥当していることが明らかになりました。

わが国は、現在、深刻な少子化社会となっています。少子化であるが故に、子どもに教育費をはじめとする多大なお金をかけることができるとともに、そのような価値意識がまた少子化を生じさせているという状況にあるかと思えます。

一方、世界に目を向けると、5歳から14歳までの子どもで、フルタイムで働くものは1億8700万人にもなっています（2002年ILOの統計）。こんなにも多くの子ども達が、家族の生活のため、経済的な貢献をしているのです。

広義にわたれば、児童労働は、決して途上国にとどまりません。私がフランスに住んでいたとき、移民と思われる小さな子ども達が信号機のところで、私の運転している車の窓ガラスを拭き、お金を求める現場に何度となく遭遇しました。

経済的格差が少なく、一様に豊かな日本に住んでいると、この児童労働の問題には無関心になりがちになりますが、世界には、教育を受けられないばかりか、大人の都合で、性的な搾取、強制債務労働をさせられている多くの子ども達さえもいることをぜひ知ってほしいと思います。

最後に、この本や本の出版に関するエピソードに触れておきます。この本は、一般向けの本ではなく、純粋に開発経済学もしくは労働経済学の専門書です。しかし、内容のレベルとしては、私が今から10年前に提出した大阪大学の大学院の修士論文をまとめたものであり、まだ研究者の卵の段階での初々しいものです。今、修士論文を書いている方々の少しでも参考になればともうれしく思います。

実は、この本は、研究生活からは全く離れていたときに出版されました。もはや経済学の研究者には、戻ることはないだろうと考え、本来、自分が目指していた医者になろうと勉強していた時期でもありました。しかし、賭け半分、未練半分で、修士論文を出版社（明石書店）に持ち込みました。もし、出版社側が出版を快諾してくれることがなかったならば、今、この京都産業大学の経済学部の教員として、また経済学者としての自分は決してなかったことと思います。思い返せば、この本の出版には、自分の人生の大きな転換点が隠されていたことを感じずにはいられません。

本は、1997年に出版され、現在、ほぼ完売された状態となっています。もしも、この本に関心がありましたら、差し上げますので、どうぞ遠慮なく研究室（第4研究室棟215）までお越しください。

（ふじの あつこ 経済学部教員）



カット 辻 智貴 美術部2年



益川敏英著；パリティ編集委員会編

いま、もう一つの素粒子論入門

丸善 1998



この本は、月刊雑誌『パリティ』に連載されたものを単行本化したものである。素粒子の世界は相対論が支配するミクロの世界である。この世界は相対論と量子力学の支配するミクロの世界である。このことに留意してまず量子力学と相対論の復習から話を始めている。

続いて相対論的量子力学即ち場の量子論の解説に入り、ディラック方程式とその量子化の話、これらを踏まえて素粒子の諸性質がこれらから如何にして導かれるかが述べられる。素粒子を記述する枠組が整った後に、ディラックの陽電子論の成立を、幾つかのエピソードを交えて紹介している。

その後次第に明らかになっていく陽子や電子の仲間達の世界を紹介する。そして1950年代に入ると加速器の性能が次第に上がり、陽子や中性子の仲間を次々につくり出せるようになり、それらの研究によって、坂田博士の複合粒子モデル(1955)を経て1964年のゲルマンそしてツバイクによるクォークモデルに収斂していく。これを幾つかのエピソードを交えて紹介している。

そしてこの本の最大の特徴であるゲージ理論の紹介に入る。これは現実の空間の自由度を対象にしているが、素粒子の種類を区別するインデックスを考慮の対象にしているかの違いだけであって、基本的にはアインシュタインの一般相対論の同種の理論である事が説明されている。この話の中でAB効果の話も紹介される。

そして弱い相互作用の展開、ゲージ理論による弱い相互作用と電磁気の統一理論、強い相互作用の理論即ちQCD理論の成功が語られている。少々高度ではあるが、この本一冊で閉じるように説明は心がけられている。素粒子論は物質の最も普遍的でファンダメンタルな存在形態を研究する学問であるから、どの様な状況でも成り立つ、即ちより例外の無い法則を探求する学問であるが、それだけにその成立過程は他の学問にとっても学問の発展の難形として参考になるだろう。

(ますかわ としひで 理学部教員)

クォーク理論 quark theory

ハドロンとよばれる一群の素粒子はクォークと名づけられた基本粒子の束縛系であるとする学説。

量子力学と相対性原理の要請により物質の基本構成要素は粒子の概念でとらえられる。今日素粒子は数百種も発見されているが、(1)電子に代表される軽粒子、(2)陽子・中性子やパイオン(湯川中間子)の属するハドロン、(3)光子、重力子、弱ボソン、色(いろ)グルーオン、ヒグス粒子の属する媒介子属、の3群に分類される。軽粒子属は電子(e)、μ(ミュー)粒子、(タウ)粒子とそれらに付随した中性微子($\bar{\nu}_e$, $\bar{\nu}_\mu$, $\bar{\nu}_\tau$)の六つと、それらの反粒子しか知られていない。媒介子属は理論的考察からの要請は別として、実験的に確認されていないのはヒグス粒子と重力子である。数百の素粒子はほとんどがハドロン属に属する。これら数百のハドロンをすべて文字どおり「素」粒子とは考えがたい。素粒子をより基本的な粒子の束縛系とみなす考えはクォーク模型 quark model とよばれ、1949年にフェルミとヤンにより提唱され、坂田昌一(しょういち)により発展させられた。しかし、坂田の模型は基本粒子として既知の陽子、中性子、(ラムダ)粒子を採用していたため、重粒子(バリオンともいい、スピン半整数のハドロン。整数スピンのものはメソンとよばれる)の特徴的性質の説明に失敗した。9年後にゲルマンとツバイクは基本粒子を未発見のクォーク粒子とする説を発表し、坂田のメソンの部分の成功を引き継ぐ理論を発表した。

その後の理論的実験的研究により、クォークは6種類以上(u, d, c, s, t, b)あるべきこと(実験的には1994年に最後に存在が確認されたt(トップ top)クォークを含め、6種類のクォークはすべて発見された)、そして一つのクォークには三つの異なる状態があることがわかってきた。クォークには色はないが、その三つを赤・青・緑の色電荷をもった状態とよんでいる。クォークの束縛系として許されるのは「白色」状態のみであると表現できる便利さから、この名前が使われている。クォークの運動を記述する力学は量子色力学(QCD)とよばれる。

クォークの存在に疑点はないものの、単一のクォークはまだ観測されていない。クォークの色電荷を源とする「色」電場は量子色力学の真空の性質により等方的に広がることなく、一次元的に絞られ、糸状となる。この糸がクォークを相互に結び付けていると考えられている。「白色」以外の状態では、この糸が無限大の長さとなり、エネルギーが無限大となるため存在できない。このため単独でクォークは存在できないと考えられている。この考えをクォークの閉じ込めという。理論的分析やコンピュータによる数値実験は、量子色力学はクォークの閉じ込めを実現していることを示唆しているが、まだ完全な証明はない。



芦立秀朗共著

日本の政治経済とアジア諸国

国際日本文化研究センター 2003



この5月に EU が拡大し、欧州統合はさらに一段階進んだ。アメリカがバラバラな州の集まりから合衆国にまで発展していった歴史とパラレルに EU の発展を理解しようという試みもある。EU を国際機構と見るか、連邦国家の初期形態と見るかは議論が分かれるところである。しかしながら、このような議論ができる背景には比較政治の発展という学問的基礎がある。アメリカでは 50 の州を分析単位とした比較州政治研究が盛んに行われている。EU 各国の政治を比較した先行研究も多い。欧州の国をアメリカの州に見立てるといった発想はこうした比較政治の蓄積に負う所が大きいのであろう。

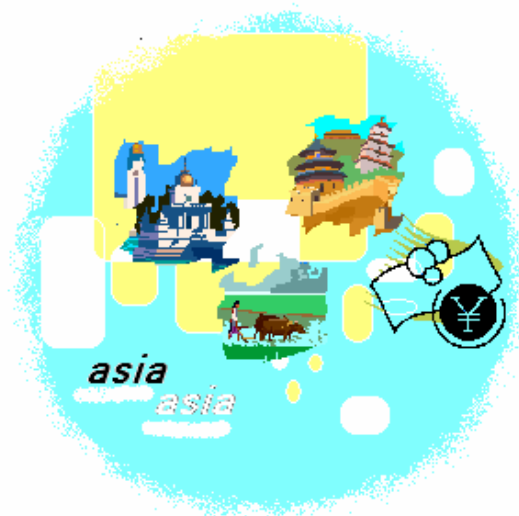
翻ってアジアを見てみると、共通のフレームワークでアジア各国を比較し理解しようという試みが少なかったように思われる。そうした中で、立ち上げられたプロジェクトが「日本の政治経済とアジア諸国」(以下、「当該プロジェクト」と略)である。アジアに関する地域研究のスペシャリストと日本政治経済の研究者が集い、戦後日本のインパクトという観点からインドネシア、韓国、タイ、フィリピン、中国、マレーシアなどアジア各国を共通の枠組みで比較することを目標とした。

今回紹介するのは当該プロジェクトの成果であり、上巻「政治秩序篇」と下巻「政治経済篇」からなる。日本の影響といった時に考えられるのは、モデルとしての貢献と物理的な貢献がある(貢献といった時に、それが正の貢献とは限らないことに留意されたい)。日本がモデルとして果たした役割に関して、政治経済篇では、日本の事前調整型の経済モデル(政府による市場への介入)が他の途上国にどのような影響を及ぼしてきたかということが分析されている。政治秩序篇で述べられているのは日本の地方分権の歩みがアジアに与えたインパクトである。地方分権については現在進行形の国が多く、評価は今後の課題となろうが、事前調整型の経済モデルに関してはアジア各国で今後見直しが求められるであろうと結論付けられている。

拙稿は、第二の貢献、つまり戦後日本がアジアに対して物理的にどう貢献してきたかに関して分析を行ったものである。中国に対する政府開発援助(ODA)を具体例にした拙稿は、日本の ODA を支えてきた従来のパラダイム(経済の相互依存関係を認識し、援助を通じた友好関係を構築する)が 1990 年代を通じて大きく転換し、貢献が縮小の方向に変わったと結論付ける。その前提にあるのは日本企業の利益の変化及び自民党内の世代交代・アクターの行動原理の変化でこそあれ、必ずしも ODA 大綱などの援助理念の定着ではない。

北朝鮮をめぐる問題、スポーツの世界でも見られる一部中国国民の反日感情等と、日本とアジアの関係は必ずしも明るいニュースばかりではない。しかしながら、日本とアジアの関係が今日非常に重要になっていることは否定できない。そうであればこそ、是非学生の皆さんに一読して頂きたい書物である。

(あしたて ひであき 法学部教員)



カット 榮村 麻美子 美術部 3 年